



道標

みち

しるべ

2013/12/2

NO. 79

〈編集・発行〉

東中3年

進路指導部

私の進路選択

最後は、国語科担当の新良先生です。

「親の思い」「子の思い」

私の父は大正生まれの頑固親父。先日、米寿を迎えました。

私が子どもの頃、ちゃぶ台返しは日常茶飯事。畳の上にひっくり返った味噌汁を片付けるのが母と私の日課でした。三歳下の弟は、事あるごとに往復ビンタを喰らっていました。父の最終学歴は尋常小学校です。幼い頃に父親を亡くし、母親が住み込みで働かなければならなくなり、親戚の家に預けられて育ちました。そんな事情で中学校には到底行かせてもらえなかったのです。

そんなこともあって、私が三歳で弟が生まれたばかりの時、私より七歳年上の従兄が両親、兄弟姉妹すべてを亡くし、親戚中をたらい回しされたあげく親戚のおじさんに連れてこられたとき、父は返事一つで引き取りました。我が家は、父、母、祖母、私、弟、従兄の六人家族になったのです。いつも、家計が火の車であったことは子どもながらに感じていました。学校の集金袋を渡されるのが父の給料日前だったので、忘れた振りを顔を赤らめながら精一杯演じた記憶があります。

明日が進路希望調査の紙を担当の先生に提出しなければならないという日の夜、私は父にある公立高校を受験させて欲しいと願い出ました。すると、父は「私立高校も受験しなさい。」と言ってくれたのです。三年後には弟も受験を控えている

し、私は我が家の家計の苦しさも知っていたからびっくりしました。父は、小学校の卒業文集に書いた「私の将来の夢」を知らぬ間に読んでいたのです。「女の子でも職業を持つことは人生を豊かにすることだ。男だから、女だからとかはない。我が子にその能力があるなら、それを助けてやるのが親の務めだ。」そう私に言ってくれました。「自分の精一杯の力で合格できた学校に行きなさい。」とも。公立一本で不合格になったらどうしようと不安で仕方なかった私は、その父の言葉に背中を押され、迷うことなく受験勉強に立ち向かうことができました。

進路担当より

「私の進路選択」シリーズは、今回で最後です。この時期、進路が具体化するみんなに参考になればと思い、企画しました。みんなの周りにはいろいろな経験をした大人がいます。先生たちのどの経験がどの子に参考になるかは分かりませんが、周りの大人も同じ悩みを経験したということは分かってもらえたでしょうか。おうちの人の経験も聞けるとさらに、自分を客観的に見つめることができるでしょう。

考え込んだり、悩んだりしているのは、自分一人だけではありません。周りの仲間も同じです。

周りにいる人たちは、みんなあなたを応援しています。今できることを少しずつ、着実にいきましょう。

